



## 八尾ならではの日常の美しさを 国内外の人に伝える

文・江口絵理 撮影・柴佳安

### “何もない町”に息づく宝

編笠を深くかぶった踊り手と、三味線や胡弓と唄が織りなす調べで知られる「おわら風の盆」。毎年9月1日から3日間、富山市南西部の越中八尾にはおわらを目当てに全国から20万人以上の人押し寄せ\*。しかしここに住む人は「おわらがない時の八尾にはなあんもないちゃ」とあっけらかんと言う。

その“なんにもない”小さな町で、歴史ある内蔵造りの町家を活用して宿泊事業を営む女性がいる。「越中八尾ベース OYATSU」のオーナー兼女将、原井紗友里さんだ。

原井さんは富山市出身。実は八尾の人と同じく、自分が育った富山なんて何もないところだと思っていた。

ところが高校卒業後、東京で4年、中国で4年を過ごして戻ってきたら、富山はまだ発掘されていない宝の山に見えた。数え切れないほどの魅力的な地域や特産品、そして世界に誇れるものづくりの技……。

「最初から豊かなものに囲まれていると、それが特別なものだなんて気づきようがないんですね」

同じように、八尾出身ではなかったからこそ八尾の魅力に気づけたのだと思う、と原井さんは初めてこの地を訪れた日を振り返った。

養蚕や紙漉きで栄えた八尾では、普段の日でも、夜、町を歩けばおわらのために稽古をする三味線の音色がどこからか聞こえ、道端のお地藏さんにはきれいな花が供えられている。石垣や石畳の通りにも風情があふれていた。

「一つひとつは、町の人にはなんでもないものかもしれない。でも外から



東京学芸大学を卒業後、中国青島の日本人学校に赴任。4年後に帰国し、富山市のコンサルティング会社勤務を経て独立。「とやま観光未来創造塾」で観光ビジネスを学び、2016年、越中八尾で体験型宿泊施設を開業

来た私には、八尾の人々の営みがとても美しく感じられました。ならば私は町の人と外の人の中に立って、八尾の日常の魅力を伝える役割ができるんじゃないかと思ったんです」

とはいえ祭りなどの華やかな非日常とは違い、飾らぬ日常の豊かさを外の人が知る機会はそうそうない。そこで原井さんが立ち上げたのが普段着の八尾を体験できる宿泊施設だった。

「宿泊も食事もお土産も一つの施設内で完結する一般的なホテルとは対照的に、OYATSUは八尾の町全体のフロント兼客室のつもりで運営しています。朝食は町内の名店から取り寄せ、滞在中は着物を着てみたり酒蔵を訪ねたり。OYATSUを拠点に町を回遊することで八尾の日常を味わっていただき、同時に、ここで使われたお金が町全体に回る仕組みを、と考えました」

OYATSUは開業後すぐに海外からのリピーターがつくほどの人気を博

し、今では日本や世界の旅行好きがコロナ収束後を心待ちにしている。

### 既存の資源を新しい仕組みで

コンサルタントとして富山県産品の海外販路を開拓してきた経験をもつ原井さんだが、宿泊事業の経験はなかった。しかし、3年前には着物を洋服やアクセサリーにリメイクするブランド「tadas」も立ち上げた。アパレル業も未経験からの挑戦だったが、着物という伝統的な資源と、単なるリサイクルではなくより良いものに作り替える「アップサイクル」を組み合わせることで新たな魅力が生まれ、注文が殺到している。

未経験者やよそ者だからこそ得られる新鮮な感動やアイデアを頼りに、原井さんは原石を掘り出して新たな価値を加え、人に届ける。「八尾の人がよそ者だった私を受け入れ、支えてくださっているからできることなんです」と原井さんは微笑んだ。

\* 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため2021年は中止